

# 令和7年度美濃地区中社研の歩み -令和8年度美濃地区大会に向けて-

美濃地区研究推進委員長

美濃中学校 前田 佳洋

## 1 岐中社美濃地区大会 研究及び実践の方向

### (1) 基本的な構え

・県中社が提案する各分野の研究の方向に則って研究・実践を推進し、その成果を発表する。

### (2) 具体的な方向性

・各市が地歴公の各分野を担当し、実践を発表する。

・R6年度（研究初年度）は、各市において授業を構想し実践する。

・R7年度は、前年度の指導案をベースにして、各市教研で内容を吟味し、実践を重ねる。

・R8は前年度までに作成した指導案について、県の主張する研究理論との関連性を明確にして本発表を行う。

## 2 今年度の研究の歩み

|           |            |                    |            |         |
|-----------|------------|--------------------|------------|---------|
| 4月28日     | 運営委員会      | ・組織の確認             | ・年度内の動きの確認 |         |
| (月)       |            |                    |            |         |
| 5月23日     | 第1回研究推進委員会 | ・昨年度の振り返りと今年度の方向確認 | ・研究の方向の検討  |         |
| (金)       |            |                    |            |         |
| 9月～10月    | 各市市教研      | ・今年度の授業実践          | ・研究会       | ・修正点の検討 |
| 10月17日(金) | 第2回研究推進委員会 | ・各市の実践交流           |            |         |

## 3 実践の概要

### ◇ 地理的分野

#### (1) 実践校・授業者

美濃市立美濃中学校 芝田大樹

#### (2) 単元名・題材

(3) 実践の概要（県中社の研究との関連を踏まえて）

「事実に関する認識を獲得する授業」と「価値に関する認識を形成する授業」を単元で明確にし、実践した。特に「価値に関する認識」を形成する思考過程の明確化を目指し、美濃市が抱える今日的な社会問題を取り上げ、その問題を改善するための提案を思考することで生徒個人における意思決定を促した。その際、既習事項である美濃市の地理的条件のみならず、日本の諸地域で学習した他地域でみられる地理的な特色や、これまでに獲得した事実に関する認識や、働かせた見方・考え方を活用して価値認識を形成できるよう計画した。本単元後に自分が住むまちの特徴を理解し、美濃市のこれからの在り方について考えようとする生徒を育てる。また、地理と公民の接続を図る単元として、未修の税金などは考えず、あくまでも地理で学習したことを活用して考えられる単元とした。

また、本時における改善案を思案する段階で自分の考えの背景にある価値を認識できていなくても、仲間との意見交流や共通点を見つける活動の中で、事実に関する認識を基に、「美濃市の強みを生かすことの良さは何なのか」ということを考えることで自身のもつ価値に気付かせる工夫を行った。

(4) 成果と課題

- 生徒が生活する美濃市を取り上げることで、主体的に学習に向かう様子が多くみられた。地理での価値認識の形成モデルを示すことができた。
- 獲得してきた地理の視点を活用しきれるように、日本の諸地域で確実に地理の視点を教師と生徒が共有することができる。また、生徒の実感を伴った問いが設定されると、より自分事として社会事象を捉えられた。

(5) 来年度の実践の方向

日本の諸地域から身近な地域までの単元を「大単元」として美濃市の学習までを見通した単元構想を実施する。各地方の学習で獲得する事実認識を身近な地域で発揮し、価値に関する認識の形成を図れるように、教師と生徒が同じ目線で単元を見通していく。

◇ 歴史的分野

(1) 実践校・授業者

関市立桜ヶ丘中学校 旧井 佑樹

(2) 単元名・題材

第5章「開国と近代日本の歩み」 2節 「欧米の進出と日本の開国」

(3) 実践の概要（県中社の研究との関連を踏まえて）

指導内容の明確化の観点では、第1時から第2時までには欧米のアジア侵略や日本の開国に至るまでの過程に関する知識や事実認識を獲得する授業を行い、本時に事実認識を獲得する授業モデルの定着と発展を目指す授業として実践を行った。昨年度と異なる点で、今年度は井伊直弼の不平等条約の締結における政治判断を国際情勢や国内の対立といった時代背景を根拠に考える場を授業の後段に設けた。特に授業を前段と後段の二部で授業を構成し、前段では資料より井伊直弼が不平等条約を締結した理由を国内・国外の両面から考えた。後段では、それらを基に交流することで多様な考えに触れつつ、身に付けた事実認識をもとに、「井伊直弼が日米修好通商条約を結ぶ決断に最も影響したものは何だろうか。」というような「順位付け」をする発問を深めの発問として位置付けることで、価値に関する認識を形成する授業につなげられるように工夫した。

(4) 成果と課題

- 昨年度と今年度で 授業前段では、事実認識を、後段に「類推」や「推論」や「順位付け」といったことを取り入れたことで、これまでに獲得した事実認識をもとに根拠をもって主体的に学習に取り組んだり、考えを語ろうとしたりする生徒が見られた。
- 生徒間で事実認識の足場をそろわない、当時の時代相を確実につかみきれていないことで社会的な見方や考え方が十分に働かせきれず、深い学びにつながりきれなかった。

## (5) 来年度の実践の方向

「類推」や「推論」にて問うまでに確かな事実認識を確実にしておかなければ、生徒の社会的な見方や考え方が上手く働かずに幅広く意見や深みのない意見に留まってしまうことが懸念される。「類推」や「推論」以外の発問の精選や検討が今後必要であると考えられる。

## ◇ 公民的分野

### (1) 実践校・授業者

郡上市立白鳥中学校 伊地田 泰真

### (2) 単元名・題材

第3章 現代の民主政治と社会 第3節 地方自治と私たち 「郡上市の地方自治」

### (3) 実践の概要（県中社の研究との関連を踏まえて）

指導内容の明確化の観点では、第1時から第4時までに、地方自治に関する知識や郡上市における地方自治の事実に関する認識を獲得する授業を行い、本時に価値に関する認識を形成する授業として、長良川鉄道の存続について議論する実践を行った。

指導方法の明確化の観点では、昨年に引き続き3人による少人数での交流の合意形成を図るというゴールを設定することで、生徒の発話量を確保し、自分の意見を語ることで価値を明らかにできるような工夫を行った。また、その後、結論が定まっていないグループを抽出し、どの点に納得がいかないのかという点を明らかにし、問題を焦点化の中で全体に価値の本質を問う指導を行った。

昨年の反省を生かし、板書に大切にしたい価値を生徒の言葉で位置付け、一人一人が考えるための土台を作って議論を行った。

### (4) 成果と課題

- 長良川鉄道の存続、廃止を話し合う際に、存続したい生徒と廃止したい生徒がどのような思いで意見をもつことに至ったのかを分析し、生徒が仲間の意見を基に議論をすることができた。この学びにより、地域に参画しようとする主体的な社会の形成者となる力が身に付いた。
- 生徒に話し合いを任せ、一人一人が仲間の意見と自分の意見を比べ、よりよい結論を出すために自ら発信していけるような話し合いの進め方を練っていく。

(5) 来年度の実践の方向

生徒一人一人が自分の大切にしたい価値を明らかにした上で、集団が納得できる合意に至るようにどのように話し合いを進めていくかを考え、実践していく。